

大阪弁の「タコツル」*

福盛 貴弘

On ‘takotsuru’ of Osaka dialect

Takahiro FUKUMORI

要旨：本稿は、田辺聖子さんが執筆した『大阪弁ちゃらんぼらん』（1978年、筑摩書房：本稿では中公文庫刊 1997年改版）を読んだ私の読後感を記したものである。田辺聖子さん（1928-、大阪府大阪市此花区；現在の福島区）と私（1970-、大阪府大阪市城東区）は42歳差になるが、大阪弁の世代差を感じつつ、私自身のことばや当時の風俗を書き記している。ここでは、18章に記された「タコツル」のエッセイをもとに、接頭辞「ド」がつく表現や罵詈雑言をあらわす卑罵語について内省しており、それらの大阪弁のアクセントを示している。

キーワード：タコツル ドアホ どつく 接頭辞「ド」 卑罵語

「タコツル」 pp.197-208

ドあほ、ド畜生、ド餓鬼、ド嬢、ド盗人、ドタフク、ドタマ、ド助平... (pp.197-198)

接頭辞「ド」をつけられる言葉に世代差あるいは個人差がある。この中でも使うものとそうでないものが。ドあほは使う。ド馬鹿は言わない。ドボケも言わない。クソバカ、クソボケとは言えるが、クソアホは言えない。なお、アホは坂田利夫¹と藤山寛美²、ドあほうは、初代桂春団治³と藤村甲子園⁴が代表的である。

¹ 坂田利夫。1941-、大阪府大阪市港区出身。1961年より吉本興業に在籍。1967年、前田五郎とコメディ No.1 結成（2009年解散）。1972年に発売された『アホの坂田』（テイチクレコード）が坂田姓に影響を与える社会現象となるぐらい近畿圏では知らないものはない芸人である。

² 藤山寛美。1929-1990、大阪府大阪市西区出身。1947年、松竹新喜劇結成に参加。「北の雄二（南都雄二）かミナミのまこと（藤田まこと）、東西南北藤山寛美」と呼ばれる遊び人として名をはせ、1966年に多額の負債のせいで解雇された。1967年に復帰し、以降20年にわたって舞台上に立ち続けてアホ役を演じ続けた、戦後の昭和を代表する上方喜劇芸人である。

³ 初代桂春団治。1878-1934、大阪府大阪市中央区出身。1895年、初代桂文我^{がとう}に入門。桂我都。1903年、桂春団治。爆笑をとれる上方落語家であり、戦前の昭和を代表する破天荒芸人であった。1983年に発売された『浪速恋しぐれ』（日本コロムビア）の歌詞に「ど阿呆春団治」とあり、戦後世代にも数々の逸話が歌詞を通じて知られている。

⁴ 少年サンデーに連載された『男どアホウ甲子園』（1970-1973、原作・佐々木守、漫画・水島新司）の主人公。熱狂的な阪神ファンである祖父が孫に甲子園と名付けた。ストレート中心、剛球一直線の投手。巨人の氏名を拒否してから紆余曲折を経て阪神に入団し、子どもの頃に出会った入団して間もない長島茂雄と引

「ド畜生」は使ったことがない。これは言ってもおかしく感じない表現。畜生よりひどい奴と出会ってないからか。

「ド餓鬼」も使わない。クソガキよりかわいげのない奴がいれば使うかもしれないが、「ドガ」という濁音連続が気になる。

「ド嬢^{かか}」も使わない。ド父もド母もド兄もド姉も言えない。クソジジイ、クソババアは言えるが、クソトーチャンには違和感がある。

「ド盗人」も使わない。ド泥棒よりは、ド盗人か。面白い。三億円事件の犯人が該当するのか、あるいは強盗殺人事件の犯人か。いずれにせよ、そんな可愛げのあるものではない。会社や店や家の金をくすねてとんだ奴が、ド盗人のレベルか。

「ドタフク」は、お多福顔をより罵った表現。この本を読んで覚えた。おたふくを美人と捉えるか、ブスと捉えるかには個人差がある。私は、おたふくを罵詈雑言に使えないので、ブサイコ⁵かブス。ドをつけるなら、ドブス。クソブスは微妙。最近を使う相手がいない。

「ドタマ」は、ド+アタマの縮約形。理解はできるが、使う機会はかなり少ない。「ドタマかちわったるか」といった用例がある。「ドタマ悪いんか」は、内省では微妙。

「ド助平」は、ドスケペーではなく、ドスケベ。私は末尾は伸ばさない。ええ歳こいた大人が、そういう話で盛り上がる機会はほとんどなくなった。だから、誰がドスケベなのか、分かりにくくなっている。ドスケベは実生活で行動規制ができていれば、問題ないのだが。

接頭辞「ド」はかつては生産性が高かったが、今は新語を作りにくくなっているように感じる⁶。

* * * * *

「タコツル」のアクセントは、ひとまず保留。

「ドアホ」は、HLL。

「アホ」は、LH。「バカ」は、HL。「ボケ」は、LH。（お笑いのボケはHL）

「クソバカ」は、LLHL。「クソボケ」は、LLLH。

「どあほう」は、LLHH~HLLL。

「ド畜生」は、LHLLL。「チクショー」は、LHLL

退直前でようやく対戦が実現し、最終話で三球三振をとる。

⁵ 共通語での辞書形は「不細工^{ぶさいく}」であるが、私の使用語彙としては「ブサイコ」。語末に指小辞「コ」がついた形に変化した語形だと推測する。

⁶ この所感については査読者からのコメントによるものである。個人差の一例として、（匿名ではあるが筆者と同世代であることは確認できた）査読者の内省を以下に示しておく。

言える：ドあほ（発音は「だあほ」）、ド畜生、ドタマ、ドスケベ
言わない：ド餓鬼、ド嬢、ド盗人、ドタフク

「ド餓鬼」は、LLH。

「ガキ」は、LH。「クソガキ」は、LLLH。

「ド嬢」は、LHL。「ドかかあ」なら、LLHL。「かかあ」は、LHL。

「クソジジー」は、HHHHL。「じじい」は、LHL。

「クソババー」は、HHHHL。「ばばあ」は、LHL。

「ド盗人」は、LLHLL~LLHHL。

「ぬすっと」は、HHLL~HHHL。「どろぼう」は、HHHH。

「ドタフク」は、LHLL。「オタフク」は、LHLL。

「ブサイコ」は、HLLL。「ブス」は、LH。「ドブス」は、LLH。

「ドタマ」は、LHL。「アタマ」は、LHL。

「ドスケベ」は、LLHL。「スケベ」は、LHL。

* * * * *

その他の「ド+」をみてみたい。ド美人、ドイケメンというように、基本的にプラスな語彙にはつかない。だからといって、ドデブ、ドブタ、ドチビ、ドノッポ、ドハゲは言わない。クソデブ、クソブタ、クソチビ、クソノッポ、クソハゲなら言えるのだが。

「ド根性」は、我々世代では『ド根性ガエル⁷』で有名だが、ド根性はもとは大阪弁であり、近松門左衛門が使っていた⁸ことからもうかがえる。

「ドツボ」は「土壺」ではなく、「ド+つぼ」だと私は思っている。ここでの壺は容器ではなく、滝つぼの「つぼ」のようにくぼんだところ。ドツボは肥溜。ドツボにはまるは、肥溜に落ちるぐらいひどいことになるということ。だから、ツボにドがついて罵言にしたのだと思っている。

「どつく」の「ど」も「ド」だと推測する。「奴を突く」で「どつく」というのは、こじつけ感がある。

最下位をあらわす「どべ」の「ど」は「ド」であろう。ベベ系語彙の「べ」に「ド」がついた形。私はベベよりベッタがなじむ。ベベタは、なんか泥臭い。人によっては「どんべ」とも。なんか泥臭い。

「どんくさい」は「ド+くさい」としたいところだが、「く」の前で「どん」となる音韻論

⁷ 少年ジャンプに連載された漫画（1970-1976、吉沢やすみ）。

⁸ 浄瑠璃『はらみときわ孕常盤』（1710、宝永7年）

的根拠が乏しい。「鈍臭い」と表記するのは違和感があるが、これは「ド」ではないのかも。

「どぐされ」というのが、ふと頭に浮かんだ。90年代半ばのフジテレビの深夜番組で、子供向けヒーローの主題歌なのに「♪どぐされげどーを たおすため」みたいな歌詞だったのを思い出した。ただ、これは大阪弁ぽくはない。『どぐされ球団⁹』の作者は長崎出身。『リーグアルハイ¹⁰』の古美門研介は鹿児島出身。だから、九州方言だと推測した。

最後に、今さらながらではあるが、「超ド級」の「ド」は卑罵語ではなく、ドレッドノートをあらわす「弩」。

* * * * *

「ド美人」のアクセントは、LHLL。「美人」は、HHH。

「ドイケメン」は、LHLLL。「イケメン」はLLHH。

「デブ」は、LH。「クソデブ」は、HHHH。

「ブタ」は、LH。「クソブタ」は、HHHH。

「チビ」は、LH。「クソチビ」は、HHHH。

「ノッポ」は、HLL。「クソノッポ」は、HHHLL。

「ハゲ」は、LH。「クソハゲ」は、HHHH。

「ド根性」は、LHLLL。「根性」は、LHLL。

「ドツボ」は、LHL。「つぼ」は、HH。

「どつく」は、HHH。「突く」は、LH。

「どべ」は、LH。「どんべ」は、LHL。

「ベッタ」は、LLH。「ベベ」は、LH。「ベベタ」は、LHL。

「どんくさい」は、HHHLL。「くさい」は、HLL。

「どくされ」は、LLLH。

「超弩級」は、HHHLL。

それから「ド阪神 (p.198)」は、LHLLL。「ドタヌキ (p.198)」は、LHLL。

⁹ 月間少年ジャンプに連載された漫画 (1978-1982、竜崎遼児)。

¹⁰ フジテレビ系列で放映されたドラマ (2012,2013,2014、脚本：古沢良太)。

「ド+」のアクセントは、低起式で語頭から2拍目の後ろに下がり目だが、例外は多い。
「クソ+」のアクセントは、高起式で後項の下がり目から下がる。後項に下がり目がない場合は第一モーラの後に下がり目がくる。

* * * * *

接頭語には「ド……」をつけたらよいとすると、これに対応して接尾語には、

「くさる」

「さらす」

「けつかる」

「こます」

などというのがあり、すべて動詞活用形下につけて活用すると、怒罵とみに生彩を帯びて、輝やかしくなる。(p.199)

この章は、とにかく卑罵語が多くて懐かしい。方言の卑罵語は、その地域でしか使わないのが通常であろうから。

「くさる」の例文は載ってないのだが、「～しくさって」が多いか。共通語に訳すると「しやがって」だが、迫力がなくなる。

「やがる」は江戸っ子も使うが、大阪弁の「さらす」は一段と語意が強い (p.199) とのこと。「何しやがる」よりは、「何さらすねん」の方が迫力があり (p.199)、間違いなくガラが悪い¹¹。なお、「何さらすねん」は「何さらしとんねん」「何さらしてんねん」というように「～とる」「～ている」で言うこともできる。「何しやがっている」は、私の内省ではありえない。

「けつかる」は「何ぬかしてけつかる」(p.199) が例示されている。私はこの基本形を聞いたことがなく、「何ぬかしてけつかんねん」が最もなじむ。古くは「けつかる」で、「けッかる」は近代風とのこと (p.200)。ただ私は詰まって言わないので、「なんかささらッけッかるねン！」(p.200) を聞いてもすぐには理解できない。この例では、「さらす+けつかる」の構造になっている。「何しくさってけつかんねん」のように「くさる+けつかる」は言えるが、「こます+けつかる」は無理。

「こます」は自分のことをいうとある (p.200) が、違和感がある。「いうてこましたった」(p.200) は、私は知らない。「こます」で思い浮かぶのは「いてこます」で、おそらく「いうてこます」の縮約形だろう。共通語に訳すると、「やってしまうぞ」なんだが、やはり迫力がない。なお、「いてこましたるか」よりは「いてまうぞ」の方がよく使われる。ほぼ同じ意味であるが、表現形式としては「いてこましたるか」の方が可愛げがある。ただし、怒りの度合いについては、言った人のイントネーションで決まるので、表現形式だけで差があるとは

¹¹ 査読者は「くさる」「さらす」を使い、「くさる」より「さらす」の方が語気が強いとのこと。私も同感である。

いいがたい。

私は今はこの手の表現を使っていない。そういう関係の相手がいなくなったということだろう。

* * * * *

「くさる」のアクセントは、HHH。

「しくさって」は、HHHHL。「しくさってけつかんねん」は、HHHHHLLLLL。

「さらす」は、HHH。

「さらすねん」は、HHHLL。

「さらしてんねん」は、HHHHHLL。

「けつかる」は、HLLL。

「けつかんねん」は、HLLLLL。

「こます」は、HHH。

「いてこます」は、HHHHH。「いてこましたるか」は、HHHHHHHL。

「いてまうぞ」は、HHHHL。

* * * * *

この章は、卑罵語が多くて面白い。こういう機会でもなければ、こういう語彙は取り扱いにくいので、ありがたい。

ケンカが、口だけで終らなくなり、暴力が用いられると、更にいろんな表現に分かれる。

撲る、叩く、こづく、のほかに、

「どつく」

「どやす」

「しばく」

「はつる」

などとあるようである。(p.202)

「ぶつ」を使わないというのは、私も同感である。この中では、「はつる」は知らない。私の内省では「なぐる」はグー、「たたく」はパー。「こづく」は「たたく」よりは弱い。そして、チョキではなく、グーでもパーでも指先でもよく、肩やひじでもよい。

「どつく」は、「なぐる」よりは激しい。「こづく」が「こ（指小辞）＋突く」で、「どつく」

が「ド+突く」と推測する¹²。私の内省では、「どつく」は基本的にグーのみ。殴る、蹴る、叩く、頭突き、肘てつ、膝蹴りなどあらゆる攻撃が入り混じったのが「しばく」。「しばく」は、武器を使ってもかまわない。だから、ボクシングなら「どついたらか」「どつきまわすぞ」が似合う。もちろん、全ての選手が似合うわけでないのは言うまでもない。「どついたらか」より「どつきまわしたろか」の方が、強めた表現。「どついてくるりと一回転させることではない (p.203)」は的確な説明である。「どつきまわすぞ」の方が、「どつきまわしたろか」よりは優しい。男は実際にするかしないかは別にして、相手に何をしてんねんと伝えたい時にしばしば使う。

なお、「しばきまわす」は言えるが、「なぐりまわす」「たたきまわす」とは言えない。「しばきまわすぞ」は、会話の中での軽いクッションとして使うことがある。

「どやす」は、私の内省では殴る、叩くの意味合いはない。口頭できつめに叱るが、しっくりくる。本文にも「雷を落とす、こっぴどく叱られて油をしぼられる (p.204)」「課長にごつつう、どやさされた (p.204)」が記されているが、私の内省ではこちらが一番目の意味になっている。

「はつる」は私の脳内に存在しない語彙なので、引用に頼る。

「はつる」もよく使うが、これはもとは皮をはぐことからきたらしく、上前をはねるとか、口銭^{こうせん}¹³をとるとか、という意味にも使う。そのせいでか、
「あたま、はつったった」

というのは使うが、「尻をはつった」とはいわない。尻は「はたく」である。(p.205)

p.205で「いわす」が加えられる。「いわしたろか」は、必ずしも暴力ではない。共通語だと、こらしめるが近いが、もう少しやっつける感が強い。

* * * * *

「なぐる」のアクセントは、HHH。

「たたく」は、HHH。「こづく」は、HHH。「ぶつ」は、LH。

「どつく」は、HHH。

「どついたらか」は、HHHHHL。

「どつきまわすぞ」は、HHHHHHHL。

「どつきまわしたろか」は、HHHHHHHHHL。

「しばく」は、HHH。

¹² 牧村史陽『大阪方言事典』では「胴突く」説だが、『日本国語大辞典』は私の推測と同様の解釈である。

¹³ 仲介手数料。

「しばきまわす」は、HHHHHHH。

「どやす」は、HHH。

「どやされた」は、HHHLL。

「はつる」は推測だが、HHH。

「はたく」は、HHH。

「いわす」は、HHH。

「いわしたるか」は、HHHHHL。

* * * * *

ようやく「タコツル」の話を。この言葉が気になってしょうがなかった。全く知らない語彙なんだが、単純解釈なら「蛸+釣る (or 吊る)」。これが派生してどういう意味になるのかがさっぱり分からない。

「タコツル、というのがありましたな」

熊八中年はいった。私も知っているが、

「あれは大阪弁ではないでしょう。よそでも使うかしら」

「それに、近頃ですなあ。僕らの子供時分は、あまり聞かなんだ」

蛸を釣られる、というのは、叱られる、という隠語であるが、なぜそういうのか分からない。(p.206)

坊主を見下して「タコ」というのは分かる。p.207にその話があるが、これは誰もが思いつくだらう。「ナニコラタココラ」は坊主相手ではないのにもめ続ける長州力と橋本真也のほほえましい罵倒合戦¹⁴。仏教系の中学校をタコ中 (p.207) とは、いかにも昭和っぽい。昔の中学は、男は坊主が多かったので、あっちこちにタコ中か。

うちはそうではなかったが、強制坊主や強制三つ編みが多発していた昭和 40 年代。強制黒髪までいくと笑えない。

閑話休題。

¹⁴ 2003年11月18日、プロレス団体 ZERO-ONE を立ち上げた橋本真也 (当時 38 歳) による記者会見中に長州力 (当時 51 歳) が乱入し罵倒し合った。以下に一部を抜粋する。

長州:「お前これ何だ。何がやりたいんだコラ! 紙面飾ってコラ! 何がやりたいのか、はっきり言ってやれコラ! 嗜みつきたいのか、嗜みつきたくないのかどっちなんだよ。どっちなんだコラ!」

橋本:「何がコラじゃ! コラ! バカ野郎」

長州:「なにコラ! タコ! コラ!」

橋本:「なんやコラ!」(以降は省略)

牧村史陽説：大阪第四師団管下の兵隊の隠語。

前田勇説：兵舎の窓から兵隊が、屋台のおでん屋の煮蛸を釣り上げるところをみつかって、叱られたから。

その他：叱られたものが茹で蛸をつるしたように赤くなるから。

子どもの頭を、両手ではさんで宙に釣り上げたから。 (pp.206-207)

兵隊さんの隠語がそれっぽいが、真相は分からない。また、著者たちが大阪弁？と疑っているので、余計に分からない。

今回の怒罵のコトバでは、男性専用はなくなりつつあるところに、今日的な意義がある。それゆえ、あえて採録した。(pp.207-208)

いろんな意味で男女同権に、昭和 40 年代はなりつつあったのか。しかし、「いわしたるか」「なにゆうてけつかんねん」「いてこますぞ」という女性が、今現在稀少であることを望んでいる。

* * * * *

「タコツル」のアクセントは、HHHH。

「タコ」は HL、「釣る」は HH。「吊る」も HH。

「坊主」は、LHL。

「タコ中」は、LLLH。

* * * * *

この章終わり。(文中敬称略)

謝辞

* 本稿は、ココログ「福盛です。」(<http://fukumori-desu.cocolog-nifty.com/blog/>)に掲載された『大阪弁ちゃらんぼらん』「タコツル」を読んで」その 1、その 2 (2017 年 10 月 4 日)、その 3 (10 月 23 日)、その 4 (11 月 4 日) その 5 (12 月 7 日) の加筆改訂版である。自身の母方言に対していろいろ思い出しつつ、素朴な基礎資料として記しておこうというリハビリを兼ねたエッセイである。そのため、文中に出てくる大阪弁に関する言い回しをそのままにしてあることについては、本稿の性質上ご了承ください。また、引用に関しても表現の変更は行なっていない。なお、田辺聖子さんと面識はない。

こういった性質のものでも掲載を許可していただいた編集委員諸氏ならびに査読者に感謝の意を申し上げます。

参考文献

田辺聖子（1978）『大阪弁ちゃらんぼらん』筑摩書房（本稿では中公文庫刊 1997 年改版）

執筆者紹介

氏名：福盛 貴弘

所属：大東文化大学外国語学部

Email：ICG01649@nifty.com